

【旧約聖書日課】ハガイ書 2章1～9節

¹七月二十一日に、主の言葉が、預言者ハガイを通して臨んだ。²「ユダの総督シャルティエルの子ゼルバベルと大祭司ヨツァダクの子ヨシュア、および民の残りの者に告げなさい。

³ お前たち、残った者のうち

誰が、昔の栄光のときのこの神殿を見たか。
今、お前たちが見ている様は何か。
目に映るのは無に等しいものではないか。

⁴ 今こそ、ゼルバベルよ、勇気を出せと

主は言われる。
大祭司ヨツァダクの子ヨシュアよ、勇気を出せ。
国の民は皆、勇気を出せ、と主は言われる。
働け、わたしはお前たちと共にいると
万軍の主は言われる。

⁵ ここに、お前たちがエジプトを出たとき

わたしがお前たちと結んだ契約がある。
わたしの霊はお前たちの中にとどまっている。恐れてはならない。

⁶ まことに、万軍の主はこう言われる。

わたしは、間もなくもう一度
天と地を、海と陸地を揺り動かす。

⁷ 諸国の民をことごとく揺り動かし

諸国のすべての民の財宝をもたらし
この神殿を栄光で満たす、と万軍の主は言われる。

⁸ 銀はわたしのもの、金もわたしのものと

万軍の主は言われる。

⁹ この新しい神殿の栄光は昔の神殿にまさると

万軍の主は言われる。
この場所にわたしは平和を与える」と
万軍の主は言われる。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二 6章14節～7章1節

⁶14あなたがたは、信仰のない人々と一緒に不釣り合いな軛につながってはなりません。

正義と不法とにどんなかわりがありますか。光と闇とに何のつながりがありますか。¹⁵

キリストとベリアルにどんな調和がありますか。信仰と不信仰に何の関係がありますか。

¹⁶神の神殿と偶像にどんな一致がありますか。わたしたちは生ける神の神殿なのです。神がこう言われているとおります。

「『わたしは彼らの間に住み、巡り歩く。
そして、彼らの神となり、
彼らはわたしの民となる。』

¹⁷ だから、あの者どもの中から出て行き、

遠ざかるように』と主は仰せになる。
『そして、汚れたものに触れるのをやめよ。
そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、

18 父となり、

あなたがたはわたしの息子、娘となる。』

全能の主はこう仰せられる。」

7¹愛する人たち、わたしたちは、このような約束を受けているのですから、肉と霊のあらゆる汚れから自分を清め、神を恐れ、完全に聖なる者となりましょう。

【福音書日課】ルカによる福音書 21章1～9節

1イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。²そして、ある貧しいやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見て、³言われた。「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。⁴あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」

⁵ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。⁶「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。」

7そこで、彼らはイエスに尋ねた。「先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。」⁸イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』とか、『時が近づいた』とか言うが、ついて行ってはならない。⁹戦争とか暴動のことを聞いても、おびえてはならない。こういうことがまず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである。」

だれよりもたくさん！【こども説教のために】

そのとき、エルサレムの神殿で過ごされた主イエスは、人々の献金をささげる姿をじっとご覧になられていました。神殿境内に設けられた賽銭箱の前には、祭りに合わせて巡礼してきた参詣者が列をなしていたのです。人々の献金は、多くが「贈り物」のように金袋に包まれたまま投げ入れられていたのかもしれませんが。

その人々の列の中に一人、様子の異なる女性を、主イエスは見つけられました。彼女は、痩せた財布をひっくり返すようにして取り出した銅貨二枚を、目立たぬようそっと賽銭箱に投げ入れたのです。

主イエスは、傍らにいた者たちにおっしゃいました、「この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた」と。それを聞いた者は、驚いたことでしょう。彼女の献金は、見るからに少額でした。ところが、主イエスは続けて言われました、「この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れた」と。

その人の実際の生活を、主イエスのご存じではなかったかもしれませんが。けれども、その様子から、銅貨二枚を献金としてささげるために逡巡してきたことは確かでした。これをささげるために、自分の一食を抜いたのかもしれませんが。そのような彼女がささげたものは、銅貨二枚に過ぎないのではない。彼女自身の生活をささげたのだと、主イエスをご覧になられたのです。

主イエスが見ている！

神を信じて礼拝にあずかるわたしたちは、しかし、神を本当の意味で知っているわけではありません。神が人知を超えたお方であると知っているだけで、ただ、そのお方がわたしたちにとって善きお方なのだと信じているのです。そのお方を見上げて礼拝をしようというとき、わたしたちは、実のところ、そのお方が本当に見えているわけでもなく、ただ、そのお方がわたしたちをご覧くださっていると信じて、礼拝をささげています。

最近では耳にすることが少なくなりましたが、「お天道さまが見ている」ということがあります。こどもに善悪をわかまえるべきことを教えるようなときに、「人が見ていなくてもお天道さまが見ているから、正しいことをするように」と教えてきたのです。

主イエスが弟子たちに教え、また実践されてお示しになられたことは、極論すれば、神は何をどのような視点でご覧になられているのか、ということに尽きるかもしれません。それは、「天の父の御心」を知り、御心の向けられた先にわたしたちの目を向ける、ということです。

それは、わたしたちには恐れ多くも、おこがましいことであるように思われます。神のことを本当には知り得ないわたしたちが、どうして、神の御心を知り、神のご覧になられる視点で物事を見ることができるようになれるのでしょうか。それどころか、わたしたちは、人間同士であってさえ、お互いの心を本当には知り得ず、いつもどこかで物の見方が互いにずれているような関係しか持てないのです。

けれども、そのように自分のことや人のことを決めつけてしまうところにこそ、わたしたちの本質的な罪の問題があるのかもしれません。

主イエスは、わたしたちに、もっと肩の力を抜くようにお教えなのです。わたしたちには、神に生かされてきた先達の残したものが与えられているからです。「聖書」です。「聖書」に生かされてきた「教会」です。そこには、さまざまな人が生かされてきた経験の中で知るようにされた神の御心が、証言されています。人を生かすお方が、どこに目をお向けになられていらっしゃるのか、生かされてきた者たちの証しが、語られているのです。そこから自ずと、わたしたちは「天の父の御心」がどこに向けられているのか、知るようにされるのではないかと、主イエスは、お示しになられたのです。

その主イエスが目を向けられたところに、弟子たちも目を向けるように促されました。そこに神の眼差しが注がれている。そこで人は生かされている。そう、弟子たちは知らされるようになったからです。

あの神殿の賽銭箱の前で主イエスがお覧になられていらしたところに目を向けるようにと、わたしたちも促されているのです。

《生ける神の神殿》を前に！

とは言え、人の献金する姿をじっと見ているというのは、気が引けるでしょう。教会では、記名でささげられた献金については、会計係がすべて記録に残していますから、一人の人がどれだけささげられたか、調べようと思えば調べられます。幸いなことに、牧師は教会の会計業務からは完全に解放されていますから、皆さんの献金について具体的に知らずに済まされています。

もちろん、献金を誰にも知られたくないとお考えの方がいても良いのです。一切、記名の献金はしないという方も、ときにはいらっしやいますし、教会によっては、そうすることを勧めている場合もあります。献金をささげる自分自身を誇らないためにそうしている、という方もあるでしょう。

それでも、主イエスが神殿で献金を賽銭箱に投げ入れる人々の姿に目を向けていらしたのですから、わたしたちも、互いの献金について無関心でいてよいということにはならないでしょう。むしろ、献金というわたしたちの実生活に直結することの中に表れているその人の現実を目を向けよと、主イエスはお示しになられているのではないのでしょうか。

主イエスが目を向けられていたのは、一人の**貧しいやもめ**だけではありません。**金持ちたち**にも目を向けられていました。そして、確かに、「この**貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた**」とおっしゃいましたが、「だから、このやもめの信仰は立派だ」と言われたわけでも、「だから、金持ちの信仰は中途半端だ」などと批判されたわけでもないのです。

余裕のある中で、その一部をささげるだけの者がある。一方で、余裕のない中で、どうかしてひねり出したわずかなものを差し出すしかない者もある。そのような者は、たしかに、そのわずかなものをひねり出すために、生活のあらゆることを日々、見直しながら過ごしているはずです。どちらの者も、神のため、神の神殿のために、ささげたのです。それでも、後者の方が、そのことに思いを向け、神の御心を尋ねることに多くの時間を割いた、ということと言えるのではないのでしょうか。

神の御心を知りたいならば、わたしたちの生活の多くの場面で、御心を尋ねて思い巡らすことは、大切なことです。

もちろん、敢えて財産を手放して貧しくなる必要はないでしょう。そうしなくても、わたしたちの互いの姿を通して、「**貧しい者**」の思いで自分自身の生活を問い直すことはできます。御心を尋ねて思い巡らすことはできます。

使徒パウロは、わたしたちが互いに「**生ける神の神殿**」として覚え合うようにと勧めました。わたしたちの神の御前に御心を尋ねる思いは、立派な神殿の建物に目を向けるよりも、一人の生きて神の御心を尋ねつつ歩む人に目を向けることによってこそ、促され、励まされるのです。